

日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow



Kanako Oya

1984年徳島県生まれ。栃木県の「絨織物技術支援センター」で1年間、機織りの基本技術を学び、織元である坂入則明氏の下で技の習得に努めている。



結城紬 (ゆうきつむぎ)

「真綿」から手で紡いだ糸で織られる絹織物で、主な生産地は鬼怒川を中心に茨城・栃木県にまたがった地域。古来からの道具を継承し、全て手作業でつくられ、その伝統的かつ高度な手法は国の重要無形文化財に指定されている。

緋(かすり)



## 結城紬・織り子

大谷 加奈子 氏

一本一本の糸に情熱を注ぎ、自ら選んだ道をひたすらに歩む。

遙か古、奈良時代からの歴史を持つ結城紬。絹でありながら素朴な風合いが持ち味の織物だ。今日では最高級の先染織物とされ、数百万円の値が付くものもあるが、もともとは絹織物をつくる過程で生まれた副産物であった。茨城県結城市。鬼怒川に抱かれ、古くから養蚕が盛んな街には今も昔ながらの紬問屋が軒を連ねる。大谷加奈子さんはその伝統を守るために、日々腕を磨いている若き職人だ。

道に進むことを決意。その後紬の製造元である織元で、機織りを専門に行う「織り子」の修業に励んでいる。作業場では、日本最古の機織り機「地機」と向き合う。そして重さ約600gもある「杼」を使い、上下に分かれたたて糸の間によこ糸を打ち込む作業を3万回以上も繰り返す。その間ずっと、大谷さんは腰当てに糸を結び付け、自らの体を使って絶えず布の向きを整えながら、糸を微妙に張つては緩める。「地機」と一体となることで歪みの無い、柔らかな手触りの布へと仕上がるのだ。

気を遣っていることは？

大谷「一度打ち込めば、その糸は絶対に動かさません。よこ糸を打ち込むたびに指でなぞり、柄が図案通りに出ているかを一本一本確かめながら慎重に織り進めています」

結城紬独特の柄である「緋」は、あらかじめ模様となる部分だけを染めたよこ糸を使って織る。この作業は、糸の打ち込みに1mmのズレも許されない繊細なもの。柄の複雑なものには、1日を費やしても10cmしか織れないこともあるという。

織元は「織り子」の織る正確さや速さなどを見極め、それぞれの腕に適した仕事を任せる。大谷さんに高度な作品が託されているのは、織元の信頼が厚いことの証。そして新たに、結城紬の中でも数を減らしている「縮織」に挑む。今まではまた異なる難しさが待ち受けているが、さらなる高みを目指して、一心に機を織る。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2010年6月取材。掲載内容は取材当時のものです。

**MOVIE MORE!!**  
「地機」と全身で向き合う彼女の姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE



パソコンやタブレット、CS放送など多彩にお楽しみください。

Web版

40人以上のバックナンバーがご覧になれます。

<http://www.athome.co.jp/tobira/>



TV番組

ディスカバリーチャンネル(CS)

冠番組「アットホーム presents 明日への扉」放映中  
毎週金曜日 22:53~23:00



ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!!



最新号のご案内 好評公開中

No.042 / 組子細工職人 松林 啓介 氏